

2.1.3 社会条件に関する現況特性

(1) 人口²⁹⁾

胆振管内では、昭和 50～60 年代をピークに人口、世帯数とも減少傾向にある。平成 27 年から令和 2 年にかけて、苫小牧市では、人口は減少しているが世帯数は増加している。

日高管内では、すべての市町で人口は減少傾向にあるが、平成 27 年から令和 2 年にかけて新冠町においては世帯数が増加しており、その他の町では減少傾向にある。

年齢階層別人口の割合では、すべての市町で高齢化が進んでいるが、令和 2 年の北海道全体の構成比(15 歳未満 11%、15～64 歳 56%、65 歳以上 32%)と比較すると、苫小牧市、室蘭市、登別市、浦河町、えりも町、新冠町、日高町、新ひだか町はほぼ同程度であるが、その他の町では生産年齢人口の割合は低い。

(2) 産業²⁹⁾

日高胆振沿岸市町における産業大分類別従業者数を見ると、第 3 次産業がどの市町でも最も大きな割合を占めている。とくに室蘭市、登別市、苫小牧市ではその割合が高く、第 1 次産業の比率が 10%以下であり、都市型の構造を示している。町部では、えりも町、新冠町、厚真町、日高町、むかわ町で第 1 次産業の比率が 30%を越えている。

白老町、様似町は第 2 次産業の比率が高いのが特徴である。



写真- 7 新ひだか町 (旧三石町)



写真- 8 こんぶ干し 新ひだか町 (旧静内町)

(3) 交通³²⁾

日高胆振沿岸における主要な道路は、国道 36 号、235 号、336 号及び道央自動車道、日高自動車道である。室蘭市から日高町までは、道央自動車道及び日高自動車道(日高厚賀まで暫定供用中)が整備されており札幌など都市部とのアクセスも良いが、新冠町からえりも町までは、高速自動車道は未整備であり国道のみの利用となっている。

鉄道は、JR 室蘭本線と JR 日高本線があり、室蘭市からむかわ町までの市町では、鉄道を利用して札幌などの都市部、他市町へのアクセスが可能である。

また、苫小牧港、室蘭港からはフェリーが就航しており、本州太平洋側及び日本海側への旅客輸送を行うとともに、農水産品や日用雑貨などの貨物輸送を行っている。

空路では、千歳市及び苫小牧市にかかる新千歳空港があり、道内外を結ぶ北海道の主要空港として旅客輸送や貨物輸送を行っている。

特に、日高胆振沿岸には道内でも貨物取扱量の多い苫小牧港、室蘭港の国際拠点港湾や、道内では最も発着便数の多い新千歳空港があり、北海道における人流・物流の中核を担う地域となっている。

(4) 民俗・風習³³⁾

本州に近い比較的温暖な地帯では、気候も温暖で過ごしやすかったことから、古くは旧石器時代から人の定住がみられた。また、当時、狩猟、漁労を生業としていたアイヌ民族の集落が各地にあったことが知られており、その文化財も多数残されている。アイヌ民族は漁猟の片手間に粟・稗・蕪などの種子を蒔き、採取する農業を行っていた。また、春から秋にかけては産卵のため海岸に寄せ、もしくは川を遡ってくる魚、鮭・鱒などをとったが、冬は南方では鹿を主とした哺乳類を狩って肉をたべ、皮を着、脂や肉を蓄えたと知られている。

江戸時代以降は、和人の進出と共に陣屋、交易所等も各所に置かれ、交易の拠点として利用されてきた。胆振沿岸は、その後森林資源と水資源を活用した製紙業や、スケトウダラ、ホッキガイ、サケ等を始めとする水産業がこの地域を代表する産業として成長し、現在では自動車産業や重化学工業等もさかんである。また、日高沿岸では、ししゃもやコンブなどの水産業や競争馬の産地としての産業が成長し現在に至っている。

日高胆振沿岸にもアイヌ民族に関する文化財も多く残されており代表的な物が、国指定重要無形文化財のアイヌ古式舞踊、国指定史跡の「シベチャリ川流域チャシ跡群及びアツペツチャシ跡」、道指定有形文化財の「アイヌ丸木船及び推進具等」がある。また、地名を見ると主なものはアイヌ語系のもので、その大部分は地形をさすものであり同様の地名がよく見られる。

(5) 海岸愛護活動

日高胆振沿岸では、ボランティア、漁業協同組合の青年部・婦人部、民間企業、財団法人などが海岸の清掃や、漁港及びその周辺の清掃などを行っており、海岸愛護活動に積極的である。



写真- 9 苫小牧市

2.1.4 利用に関する現況特性

(1) 観光資源・施設分布

令和6年³⁶⁾における観光入り込み客数は、登別市・苫小牧市・室蘭市・白老町で100万人を越えており、以下、日高町、新冠町、むかわ町、新ひだか町、えりも町、浦河町、厚真町、様似町の順となっている。観光入り込みの経年変化は、北海道全体・胆振管内・日高管内ともに増加傾向にある。

観光宿泊客数を見ると、登別市における宿泊客の比率が32.5%と高く、温泉地を中心とした滞在型観光地であることが伺える。室蘭市・浦河町の宿泊客比率は約25%であり、その他の市町では5%～20%となっている。

観光資源・施設分布は、各市町における市町要覧より、沿岸部のほぼ全域に分布している。特産品では、全国的に有名な日高昆布を中心とした水産品が多い。

(2) 海洋性レクリエーション施設

日高胆振沿岸における海浜公園は、日高町のフィリップ海浜公園、新ひだか町の三石海浜公園、様似町の親子岩ふれ愛ビーチ公園の3つである。



写真- 10 様似町



写真- 11 新ひだか町（旧三石町）

(3) 海洋性レクリエーション利用

① 船舶利用^{39)、40)、41)}

室蘭市、苫小牧市、登別市、白老町では利用者の増減が著しいが、平成10年における利用者数はそれぞれ1万人を超えており胆振沿岸における釣船利用者が多い。また、その他の町では4千人未満である。

② 海岸利用

日高胆振沿岸市町における海岸利用者数^{39)、40)、41)}を見ると、全体に増加傾向にある。新ひだか町（旧静内町）では潮干狩りが有名であり、白老町・厚真町の浜厚真はサーフスポットとして有名である。なかでも、厚真町ではサーフィン⁵⁰⁾のコンテストが開催されたこともある。

また、プレジャーボートに対応する施設としては、室蘭市³³⁾、苫小牧市にはマリーナが整備されている。



写真-12 潮干狩り 新ひだか町（旧静内町）

(4) 施設規模

① 国際拠点港湾³³⁾

日高胆振沿岸には、室蘭港と苫小牧港の国際拠点港湾があり、北海道における大部分の貨物を取り扱っている。令和5年における取扱貨物量は苫小牧港³⁵⁾ 101,280千トン、室蘭港 12,500千トンである。主要取扱品は苫小牧港で紙・パルプ、輸送機械、原油、石油製品、室蘭港で鉱産品、金属機械工業品、化学工業品となっている。



写真-13 航空写真（苫小牧港⁵⁶⁾）

② 地方港湾³³⁾

日高胆振沿岸における地方港湾は、白老港・浦河港・えりも港となっている。

令和5年における貨物量は、白老港 810千トン、浦河港 335千トン、えりも港 11千トンであり、主要取扱品目は白老港で砂利・砂・石材等、その他鉱産品、その他学工業品、浦河港で砂利・砂・石材等、雑工業品、水産品、えりも港で水産品、雑工業品、食品工業品となっている。

③ 漁港^{27)、46)}

日高胆振沿岸における漁港施設は、第1種漁港 22港、第3種漁港 4港、第4種漁港 1港、計 27港が整備されている。

(5) 航路⁴⁴⁾

室蘭港の航路はフェリー・内航貨物船が就航しており、苫小牧港³⁵⁾では外航貨物船・外航コンテナ船・フェリー・内航貨物船・内航コンテナ船・RORO 船が就航している。室蘭港、苫小牧港は国内外を結ぶ航路を多く有しており、北海道物流の拠点となっている。

(6) 漁業利用

① 海面漁業^{27), 46)}

令和 5 年における日高胆振沿岸の漁業生産額を見ると、えりも町・室蘭市・白老町・苫小牧市・浦河町・様似町・新ひだか町で 10 億円を超えており、以下、日高町、登別市、むかわ町、厚真町、新冠町の順になっている。

② 内水面漁業⁴⁶⁾

日高胆振沿岸における内水面漁業は、静内町と様似町で内水面漁業が行われている。その他市町については、記録が残っていないため不明である。

(7) 遊漁³⁹⁾

日高胆振沿岸市町における平成 10 年の遊漁案内業者は、胆振沿岸では、白老町 80 件、室蘭市 72 件が特に多く、計 214 件である。日高沿岸では、門別町 30 件が最も多くついで静内町 19 件、浦河町 18 件計 81 件である。

2.1.5 海岸保全の現況

(1) 海岸管理区分⁵²⁾

日高胆振沿岸市町における海岸管理区分図を次頁に示す。

日高胆振沿岸では、総海岸線延長約270km(共管区間約81km含む)のうち、約71%の約191kmが国土交通省水管理・国土保全局、約16%が国土交通省港湾局、約11%が農林水産省水産庁、約3%が農林水産省農村振興局の所管となっている。

(2) 海岸保全施設

日高胆振沿岸市町における海岸保全施設を写真-14～写真-16に示す。

特徴的な対策工を実施している海岸としては、旧建設省の直轄区域である胆振海岸と、旧運輸省所管の苫小牧港の汐見地区が挙げられる。

前者では、比較的新しい工法である人工リーフ⁵¹⁾が設置されており、近年は養浜工による対策も計画されている。後者では、苫小牧港管理組合⁵³⁾によって施工された「ふるさと海岸」があり、特に親水性に配慮した緩傾斜護岸等の保全施設が整備されている。

(3) 被災状況

日高胆振沿岸市町における被災状況を写真-17～写真-18に示す。

北海道砂防災害課⁵⁴⁾でとりまとめられている過去の海岸災害実績については以下のとおり。

昭和50年代の海岸災害は、毎年10件以上発生していたが、昭和60年代頃からは10件以下に減少している。昭和52年以降最も災害復旧事業が多かったのは昭和56年であり、合計33件に及んでいる。

なお、災害復旧事業が採択された海岸としては、苫小牧海岸(38件)、白老海岸(30件)、門別海岸(30件)、登別海岸(26件)が突出して多い。

また、各市町村史誌をもとに過去の大きな海岸災害について見てみると、十勝沖地震津波などの津波や高潮及び、暴風浪による大きな災害記録が残されている。

(4) 土砂採取⁵⁵⁾

日高胆振沿岸の日高町(旧門別町)、むかわ町、厚真町、苫小牧市及び登別市では認可をうけて土砂の採取が行われている。ただし、土砂採取については基本的に「海岸保全区域では認可しない」、「掘削した箇所を埋め戻すこと」を前提とした認可となっている。

